

花壇づくりのヒント 12か月

4月 スイセンの花後管理

スイセンは香りが良く、早春を代表する球根植物として人気です。日本で昔から親しまれているニホンスイセンは、花の少ない12月頃から咲き始め、長い間楽しめます。一方、ラッパズイセンをはじめとした多くの園芸品種があるセイヨウスイセンはニホンスイセンが終わったあとの3月ぐらいから咲き始め、春の花壇を彩ります。

今回はスイセンを翌年以降も楽しむための花後の管理方法をご紹介します。



ニホンスイセン
香りが良く、
清楚な花が
冬から早春の
間楽しめる



セイヨウスイセン
花が大きく豪華
なものや、花の
中心が八重の
ものなどバリエー
ション豊富

【ニホンスイセンよもやま話】日本水仙と言うからには日本原産だろう、と思ってしまうのですが、スイセンの多くは地中海沿岸地域が原産で日本にはもともと自生していません。平安時代末期に中国から伝わったと言われており、古くは室町時代の文献に「漢名：水仙華 和名：雪中花」と紹介されているそうです。



1. 開花中の管理 (地植えでも鉢植えでも栽培方法は基本的に同じです。)

球根を植える前に、植える場所に元肥^{*1}を施しておけば、開花中はほぼ追肥^{*2}の必要はありません。

※1. 植物を植える前の土に、元々与えておく肥料 ※2. 植物の生育中に適宜与える肥料

球根に水分を蓄えているため乾燥にも比較的強いので、地植えの場合、雨が少なく、土の乾燥が続く場合のみ水を与える程度で充分です。鉢植えの場合は乾きやすいので地植えより気をつけて、土の中まで乾燥したら水をやります。

「元肥」、「追肥」や「水やりの目安」について、詳しくは「[花壇づくりのヒント 12か月 1月](#)」の記事をご覧ください。

2. 花がら摘み

花が咲き終わり、花びらがしおれてきたら種ができる前に花茎のもとからハサミで切り取ります。

この時、葉は切り取らず残します。残った葉で光合成をして葉が枯れるまで栄養を作り、翌年以降の球根を育てます。



【花がら摘み前】



【花がら摘み後】



3. お礼肥

梅雨明け頃になると葉全体が黄色くなり、最終的に茶色く枯れてきます。それまでに球根を育てるため、花後なるべく早く、速効性の肥料を「お礼肥（おれいごえ）」として施しましょう。速効性肥料の代表は液肥ですが、細かい粒状や粉末状の化成肥料もおすすめです。肥料を与えるときは、それぞれのパッケージに記載してある分量を守ります。球根を育てようと多く与えすぎると球根や根が腐ってしまいます。この症状を「肥料焼け」「肥料あたり」と言います。



・株元に肥料をまく。小粒の化成肥料などが扱いやすく、比較的早く効く



・葉の全体が茶色く枯れるまで残しておく（上の写真よりもっと全体的に枯れるまで残す）



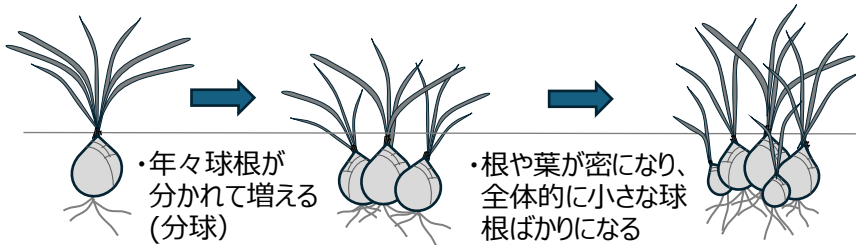
・葉が長く広がって邪魔になる時は、軽く束ねるとスッキリする

4. 堀上げ、株分け

スイセンは球根を植えてからしばらくは植えっぱなしで翌年も花が咲きます。植えっぱなしにする場合は、葉が茶色く枯れたら株元から切り（引っ張ると自然に葉が取れる場合もあります）、夏は肥料やりを控えて育てます。

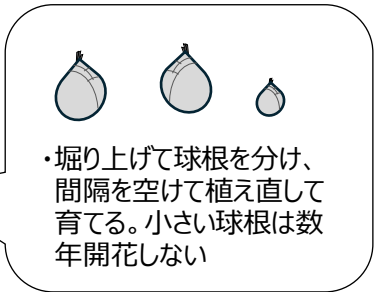
植えて3~4年経つと球根が増えて混み合い、葉や球根が育つスペースが小さくなります。そうすると土の中の水分や栄養分を奪い合い、球根の生育が悪くなります。その場合は一度堀上げ、球根を分けて植え直します。

【スイセンの球根の育ち方】



・年々球根が分かれて増える（分球）

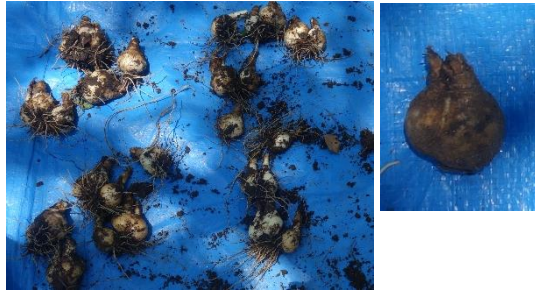
・根や葉が密になり、全体的に小さな球根ばかりになる



・堀り上げて球根を分け、間隔を空けて植え直して育てる。小さい球根は数年開花しない



・葉が全体に茶色く枯れたら球根を堀り上げる



・土を落とし、球根を分け、葉や根は取る



水ゴケなど
でくるむと球
根が腐るので乾燥
させて保管する

・ネットなどに入れ、軒下などの、雨が当たらず風通しが良い半日陰で保管する

秋になり、球根を植える適期になったら、元肥を施し耕した土に植えます。小さすぎる球根は翌春には開花しないかも知れませんが、1、2年育てればきっと花を咲かせてくれますので楽しみに。

★次回5月は『簡単なバラ栽培』をご紹介します。

※資料は個人でのご活用に残らせていただけますよう、よろしくお願いいたします。